

訪ねてみよう 中山道鶴沼宿 市内全域へ



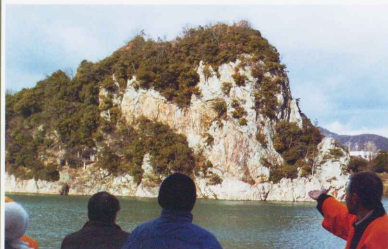
防ねてみよう中山道鶴沼宿 (市内全域へ)

目次

- ① 貞照寺と晚松園
- ② 鶴沼城
- ③ 村国真墨田神社
- ④ 伊木山
- ⑤ 嫁ふり坂
- ⑥ 済北山大安寺・大谷行部の墓標
- ⑦ 村国座
- ⑧ 旧桜井家
- ⑨ 大牧一号古墳
- ⑩ 進禄寺
- ⑪ 村国男依と山田寺跡
- ⑫ 加佐美神社
- ⑬ 中世の館跡(安積家)
- ⑭ 伝蘇我倉山石川麻呂の墓
- ⑮ 旗本徳山陣屋公園
- ⑯ 柄山古墳
- ⑰ 薬師寺岐阜別院花会式と放生会
- ⑱ うばがふところ
- ⑲ 前渡不動
- ⑳ 川並衆と前渡の渡し
- ㉑ 安楽寺
- ㉒ 河野西入坊
- ㉓ 河跡湖公園



訪ねてみよう中山道鶺沼宿 〈市内全域へ〉



中山道鶺沼宿ボランティアガイド

② 鶺沼城



別名霧が城は室町時代の築城であり、難攻不落の小山城であった。城主は土岐氏、斉藤氏に仕え鶺沼の虎と恐れられた大澤次郎左衛門（正秀）、勇猛果敢で野戦に強く織田信長も再三痛目にあつた。斉藤義龍の時代には、反信長連合を築き信長に対抗した。信長は木下藤吉郎に命令し、まず伊木山城を講和に持ち込み味方に付けた上で羽場内野に着陣、日暮れを待ち雑兵にたいまつを大量に持たせ内

野の丘を走り回らせた。一方、鶺沼城からこれを見た大澤氏は得意の野戦に主力を引き連れ打って出た。その直後、城の裏側の清水に伏せてあつた木下勢の一隊が素早く城に火を放つた。羽場の内野で自分の城が焼けるのを見て、さすがの大澤氏も観念し降伏した。しかし、その後の木下藤吉郎の配慮に深く恩義を感じ、美濃統一に大きな影響を与えた。美濃（鶺沼）を制する者は天下を制す。

訪ねてみよう中山道鶺沼宿 〈市内全域へ〉



中山道鶺沼宿ボランティアガイド

① 貞照寺と晩松園



貞照寺は、日本女優の祖として有名な貞奴が建立した寺院である。貞奴は、日本だけでなく欧州巡業では「マダム貞奴」と呼ばれ爆発的な人気を得た。生涯を通じて成田不動尊を厚く信仰し、晩年私費を投じ貞照寺（金剛山桃光院貞照寺）を建立した。

要が盛大に行われた。総ひのき造りの本堂の他には八枚の胴羽目彫刻があり、貞奴が生涯を通じて不動尊から授かった靈験を主題とする。貞奴の死後現在は、成田山貞照寺と改名。門前には貞奴の別荘「晩松園」があり、門主屋、茶室からなり、現在公開（要予約）されている。諸芸上達芸能の寺として全国から参拝客が訪れている。所在地は、市の東端鶺沼宝積寺町である。

訪ねてみよう中山道鶺沼宿 〈市内全域へ〉



中山道鶺沼宿ボランティアガイド

④ 伊木山

夕暮れ富士の別名を持つ伊木山は標高一七三級の低い山である。この山に戦国時代に、曲輪が五カ所の小規模な山城があった。このころは石垣や天守はなく、丸太のやぐら組みの砦(とり)であった。調査によると、崖には石を積んだ跡が確認されており、当時としては先進的なことだといわれている。

信長の美濃攻略の時に、伊木山城の攻略に活躍した香川長兵衛が伊木清兵衛と名前を改めていた。ここを足がかりにして大名斎藤方の鶺沼城を攻略した。信長が伊木山に登った折には、清兵衛が山芋のとうろろ汁でもてなしたともいわれている。

また、江戸時代後期に日本で四番目の高さの槍ヶ岳を開山した修行僧、播隆上人が修行したと伝わる岩場が南側中腹にある。

休日にはテニスやバーベキューなどで家族連れが響く山であるが、歴史の染み込んだ山でもある。

訪ねてみよう中山道鶺沼宿 〈市内全域へ〉



中山道鶺沼宿ボランティアガイド

③ 村国真墨田 神社

村国真墨田神社は鶺沼の産土(うぶすな)神である。七世紀ごろに創建され、平安時代に編さんされた「延喜式」という書物にも記載されている。

一宮の真清田神社の天之火明命(あめのほあかりのみこと)と垂井の南宮大社の金山彦命(かなやまひこのみこと)が奉られている。天之火明命は鏡作りの祖神、金山彦命は鍛冶技工を司る。また、壬申の乱で活躍の豪族村国男依(むらくにの)おより)も、祭神として合祀(ごうし)された。十月に行われる例大祭には宮太鼓の響きとともに屋形を先頭にみこしの御神幸が木曾川沿いの御旅所まで続く。御旅所は昔神社が奉られていた場所でもある。

この地域は戦国時代には極めて重要な拠点であった。地元の有力者河村惣六は羽柴秀吉に協力し、花押入り印判状を頂く。秀吉の許可で現在の場所に神社を遷宮。印判状は今も神社に残されている。

訪ねてみよう中山道鶉沼宿 〈市内全域へ〉



中山道鶉沼宿ボランティアガイド

⑥ 濟北山大安寺 大谷刑部の墓標

笑堂常訥（しょうどうじょうきやう）を開山、美濃国守護土岐頼益を開基とし六百年前の室町時代に創建された臨濟宗の由緒ある寺である。新池の北、境内の南東にまつられている頼益と斎藤利水の墓所から数十歩下った一角に、大谷刑部少輔吉継の朽ち掛けた墓標がひっそりと置かれている。刑部は関ヶ原の戦いで病をおして三成に加勢し負けを悟るや深く戦場で自刃した話をはじめ、多くの逸話が伝

えられ、後世の草紙・講談・武者絵の作家に格好のネタを供（きよ）う）してきた武将の一人。昨今の歴史による人気投票でも伊達政宗について二位の座を保っている。

戦国時代を駆け抜けた刑部のしるしがなぜ鶉沼の地に存在しているのかは諸説伝えられているが、はっきりしていない。境内は良質な散策コースで、参詣の折にはこの墓標を探し出してみたいかがたてようか。

訪ねてみよう中山道鶉沼宿 〈市内全域へ〉



中山道鶉沼宿ボランティアガイド

⑤ 嫁ふり坂

各務原の昔話に「嫁ふり坂」という話がある。舞台は、丸子団地北東の鶉沼羽場町の台地から古市場地区の平地に続く高低差十数層の坂である。舗装された真つすくな坂であるが、昔は、くの字に折れ曲がっていた。さて、昔話では、嫁を駕籠（かこ）に乗せて連れて行くとき、坂があまりに急なので駕籠を振り振り下り、銭を要求したという。こんな雲助のような駕籠屋を嫁たちはひどく怖

がったという。また別の話では、坂の下の尾張の国へ嫁に行ったおゆうという娘が、木曾川の大水にはばまれて、母親の死に目に会えず坂を恨んで泣いたという。そこから、いつしかこの坂を「嫁ふり坂」と呼ぶようになった。

現在では畑の中の何ら変哲のない坂だが、こんな言い伝えが残っている。いわれを知って歩けば、この坂がまた違ったものに見えてくる。

訪ねてみよう中山道鶉沼宿 〈市内全域へ〉



中山道鶉沼宿ボランティアガイド

⑧ 旧桜井家



昭和五十一年に各務原市の重要有形民俗文化財に指定された旧桜井家は、明治四年に建てられた典型的な養蚕農家である。

明治二十四年の濃尾震災で倒壊したが、明治三十二年に古材で再建された。間口十八・七尺、奥行九・五尺の平入り造り、屋根は藁葺（わらぶき）であった。間取りは四八五はち、八畳間四つ、仏間二畳、隠居部屋（四畳、十間）玄関と炊事場、三尺廊下（南北両

側、馬屋となっている。屋内には、頑丈な曲梁（まがりばり）や尺の大黒柱、各部屋の天井はその位置や用途によってすのこ天井（土間、大引天井（台所、根太天井（居間、障かゝ）縁天井（座敷）の四種類の造りがある。享保十一年（一七二六）に本格的に行われた三ツ池の開発により、二代目桜井九六は武士に準ずる特権を得た。鶉沼宿本陣を勤めた桜井家の分家である。

訪ねてみよう中山道鶉沼宿 〈市内全域へ〉



中山道鶉沼宿ボランティアガイド

⑦ 村国座



各務おがせ町に壬申の乱（六七二年）で活躍した村国男依（むらくにのおより）をまつた村国神社がある。この境内に「劇場型」農村舞台の村国座がある。江戸末期に計画され明治十年に完成した。この芝居小屋は、本格的な廻り舞台、花道奈落などの舞台機構を持ち、全国的にも貴重なものである。昭和四十九年に国の重要有形民俗文化財の指定を受けた。

ここでは、若連中や

青年団を中心に芝居を上演していたが、昭和四十年代から村国神社の祭礼の日、十月第二土、日曜に奉納子供歌舞伎が上演されている。築後百三十年を経て老朽化と耐震の必要性から、平成十八年から三年をかけ、往時の型をいかし、浄財など約二億円をかけ平成の大修理が行われた。現在、各務原市の管理のもとに、子供歌舞伎の他、コンサートや演劇などのイベントが開催されている。

訪ねてみよう中山道鶉沼宿 〈市内全域へ〉



中山道鶉沼宿ボランティアガイド

⑩ 進禄寺



子どもたちの歓声が響く蘇原の吉新公園東に進禄寺がある。

吉新公園の吉新は、吉兵衛新田の略で、この地の地名である。吉兵衛は新田を一七六五年から六年かけて開墾した人物であり、進禄寺の開基でもある。

参道入り口の安永五年（一七七六）の灯笼には「加官山進禄堂」とあり、安永年間には「加官山進禄寺」としていたのである。宗派は、浄土真宗本願寺派である。

また、吉兵衛寄進の石造物が奥院にあり、儒・仏・神の三教を習合した三尊像は、全国的にもまれである。石工は犬山御石工の縣範石衛門橘陸正と門人であり、石材は硬質砂岩の鶉沼石である。他に善光寺如来像、宝篋印塔も縣氏の作である。

住職によると儒・仏・神の三尊像の台脚は、濃尾地震前は仏が正面だったそ

訪ねてみよう中山道鶉沼宿 〈市内全域へ〉



中山道鶉沼宿ボランティアガイド

⑨ 大牧一号古墳



この古墳は鶉沼大伊木町、陵南小学校敷地内にあり、古墳時代後期（六〜七世紀）のものとして、各務原台地の南縁から木曾川に向けて突き出す大牧台地の北端部に位置し総数八十基以上からなる大牧古墳群の中心的な地位を占める。

全長四十五メートルの前方後円墳と推定され、内部には南に開口する横穴式石室が構築されている。室内には凝灰石の組み合わせ式家形石棺がほぼ完全な形で残

っている。土器・須恵器、刀や鉾（ほこ）の武器類や鍔（よろい）、馬具類、金環などの装飾品が発見され、石室の大きさや副葬品の内容からこの辺りを治めていた豪族の墓と考えられているが、どんな人物かは分かっていない。

古墳が学校の敷地内にあるのは全国的にも珍しく、身近な教材として注目されている。

古代人の生活や真事、風景を想像するのも楽しいものである。

訪ねてみよう中山道鶉沼宿 〈市内全域へ〉



中山道鶉沼宿ボランティアガイド

⑫ 加佐美神社

この社は、加佐美山の南山の麓に境内を持ち、建物は南に向けて配置されている。「蘇原の歴史」によると、加佐美山の祭神は、加佐美大神・応神天皇・蘇我倉山田石川麻呂の三神である。江戸時代の社名は八幡宮と呼ばれていたが、神自体は六世紀頃には、産土大神としておまつりしていたという。

平安時代の延喜式元〇八年に記録され、式内社に列すとあり、本殿は貞享四年、拜殿は延享三年、幣殿は明治四十三

年の造営で国の登録有形文化財に指定されている。

境内には阿弥陀（あみだ）如来が安置されていたが、現在は蘇原古市場の光泉寺に移されている。歴史遺産としては、木彫狛犬・獅子頭・木札放生会御頭之次第・阿弥陀仏宝殿開帳事書などが市の指定文化財である。

江戸時代には、朱塗りの両部鳥居もあったが、現在は石造りの大正六年に建てた神明鳥居である。

訪ねてみよう中山道鶉沼宿 〈市内全域へ〉



中山道鶉沼宿ボランティアガイド

⑪ 村国男依と山田寺跡

巨大な古墳に代わって仏教寺院が続々と造営され、日本の古代国家が、ようやくその形を整え始めた飛鳥時代。その息吹は三野国各美評に及ぶ。加佐美廃寺、山田寺跡、平蔵寺跡、野口廃寺などである。

山田寺は近年の発掘調査によって東西八十二尺、南北六十九尺の伽藍（がらん）規模から五重塔を備えた壮大な寺院であったことが想定される。その後、この寺院の南側で官衙（かんが）役所跡と考

えられる広畑野口遺跡が発掘された。そして村国男依の創建と伝わる江南市村久野の音楽寺跡から出土した細弁（さいべん）軒丸瓦は、山田寺跡出土のものと同范（どうはん）である可能性が高いとされ、村国男依と山田寺との結びつきが考えられる。

いずれにせよ、現在の蘇原地区を中心に官衙を取り囲むように寺院群が並び建ち、近くを東山道が通る古代各務原があったのである。

訪ねてみよう中山道鶉沼宿 〈市内全域へ〉

⑬ 中世の館跡 (安積家)

中山道鶉沼宿ボランティアガイド



安積家は蘇原野口町にあるが、この地に鎌倉時代、館があった。館とは自分の領地に住んでいた武士の住居をそう呼んでいた。館は領地の中心部の高い場所に板塀や土塁を高く築き、外側に堀をめぐらし、門の上に物見櫓(やぐら)を造った。館の中央には主人の住む母屋、その脇に家子・郎党の詰め所、下人の小屋、馬小屋、納屋があつたといわれている。東西約七十七尺、南北約七十六尺のほぼ正方形の館跡が、この地に現存している。虎口部分に山門があつた。これが各務原市に寄付され、中山道鶉沼宿町屋館駐車場にある鉄門(くろがねもん)である。解体によって大垣城本丸の表口に建てられていた高麗門形式の鉄門であつたことが判明、市指定文化財となつている。同様の遺構は名古屋城と大阪城の一例だけである。

訪ねてみよう中山道鶉沼宿 〈市内全域へ〉

⑭ 伝蘇我倉山田石川麻呂の墓

中山道鶉沼宿ボランティアガイド



蘇原の各務原市クリンセンター北西二百餘ぐらいの所にある小丘陵に「伝蘇我倉山田石川麻呂の墓」の標柱が立っている。この蘇原には大化改新(六四五年)に中大兄皇子(天智天皇)を援けて、蘇我蝦夷・入鹿を滅ぼした蘇我一族の石川麻呂が葬られたとの伝承が残っている。中大兄皇子と中臣鎌足は強力な蘇我本宗家を討つため、蘇我の分家筆頭の石川麻呂を味方につけ、クーデターを成功させた。しかし石大臣となつた石川麻呂はわずか四年後に、謀反の罪に問われ、飛鳥にある氏寺の山田寺で妻子と共に自害し果てた。だが、蘇我氏の血は天智天皇の妃となつた石川麻呂の二人の娘、遠智娘から持統天皇へ、姪娘から元明天皇へと続いていった。近くには、山田寺や飛鳥田神社があり、塚の上に立ち黄金色の稲穂を見ていると、本宮に大和飛鳥のようだ。

訪ねてみよう中山道鶉沼宿 〈市内全域へ〉



⑬ 柄山古墳

中山道鶉沼宿
ポランテアガイド

柄山(からやま)古墳は、市の西北端尾崎団地の下、那加柄山町にある。独立丘陵柄山の山頂に、今から約千六百年前四世紀後半から五世紀初頭ころに築かれた前方後円墳である。

全長約八十二メートル、後円部に比べ、前方部が小規模という初期の前方後円墳に見られる特徴をよく残している。鶉の頭を模した埴輪(全長十一・六メートル)が出土しており、市の重要文化財に指定されている。

柄山古墳の西方約八

古代びと

偲ぶ柄山

秋の風

訪ねてみよう中山道鶉沼宿 〈市内全域へ〉



⑭ 旗本徳山陣屋公園

中山道鶉沼宿ポランテアガイド

旗本徳山陣屋公園は那加西市場町三丁目であり戦国時代から明治まで十二代続いた旗本徳山氏の江戸期における陣屋跡である。

初代となる徳山五兵衛則秀は、織田信長、柴田勝家、前田利家に仕えたが、関ヶ原の戦いでは徳川家康側につき戦功をあげた。

以後徳川幕府の直参旗本として出身地である徳山郷(現揖斐川町)と各務郡の一部那加地区、蘇原地区で五千石を所領した。

この徳山氏は江戸で要職について活躍していたため、各務郡を治める拠点として、更木郷と呼ばれた地域の中心である西市場に陣屋を設けた。実質の運営は一族などに任せていたようである。

陣屋跡で発掘調査を行い、江戸期の古文書「更木陣屋絵図」を元に、陣屋跡のイメージ公園として平成十五年に完成した公園である。

なお、同十八年には、日本の歴史公園百選にも選出されている。

訪ねてみよう中山道鶉沼宿 〈市内全域へ〉



中山道鶉沼宿ボランティアガイド

18 うばがふところ

尾崎北町一丁目の三峰南麓に「うばがふところ」と呼ばれる谷がある。古くから村に伝わる民話が出来である。

戦国時代の落城の折命からがらに逃げた乳飲み子の若様と乳母がたどりついた所には谷から清水が湧き出ている。お腹がすいて泣きやまない若様は、その水を飲むと泣きやみぐっすりと眠った。

乳母もその水のおかげで再び乳が出るようになった。翌朝、村人に助けられた若様は立派

に成人されたそうだ。以来、この水を飲むと、乳が出るという「乳母がふところ」と呼ばれるようになった。子どもが生まれると、ここにお参りして、清水をくむ人が訪れるようになった。

また、谷の清水の奇跡とともに、不幸に見舞われた若様と乳母を温かく見守った村人の優しい心を伝える民話でもある。住宅街を一步入ったこの場所は、今も緑の木々や谷が当時を思い起こさせる。

訪ねてみよう中山道鶉沼宿 〈市内全域へ〉



中山道鶉沼宿ボランティアガイド

17 薬師寺岐阜別院 花会式と放生会

昭和十三年に川崎航空機工業が従業員信仰の場として、川崎山薬師寺を建立し住人の心のよりどころとした別院である。昭和二十一年に本山の奈良薬師寺より秘藏の奈良寺如来像を御請(かんじょう)して安置された。

人々からは「お薬師さま」とあがめられ、人々のあらゆる病気を癒やし、苦悩を救い身も心も安らかにしてくださる仏様である。

「花会式」とは、当時の本山である奈良薬師

寺で、九百年以上行われていた伝統法要である。毎年四月二十九日に当寺でも行われる。古く歴史のある和紙の造花で美しく飾られる。

また、年に一度の御本尊の門扉開放行事が行われるが、この本尊は岐阜重要文化財の薬師如来坐像である。

午後からは「放生会」が行われ、法要後には、境川に稚魚を放流し無事育つことを祈って行事を終わる。

訪ねてみよう中山道鵜沼宿 〈市内全域へ〉



中山道鵜沼宿ボランティアガイド

⑳ 川並衆と 前渡の渡し

本曾川九瀬の渡しのうち、承久三年の「承久の乱」に最も重要な陣が置かれた所が摩免戸前渡であった。また、古くから本曾川を利用し、信濃や美濃の山奥から船で材木などの運送業をなりわいとする人たちの、物資を強奪する一団が河族と呼ばれ恐れられていた。

その情勢を見た土豪生駒宗家が、頭目たちをまとめ賊の名を返上させて、川並衆と名を改め川筋の武将たちへ船運送の助っ人役を

正業とした。最初の活躍は永祿三年桶狭間の隠密作戦に始まる。

一方渡しの公認は、天正十二年小牧長久手の戦いの時、前渡・草井の村人が秀吉軍に協力した功により渡船の元締めが任命されたのが始まりである。近世に至り、本曾の開発とともに渡し自体も重要性が高まり活気づくが、上流三百戸の所に愛岐大橋が完成し、約三百八十年続いた渡しも、昭和四十四年三月に役割を終えた。

訪ねてみよう中山道鵜沼宿 〈市内全域へ〉



中山道鵜沼宿ボランティアガイド

⑲ 前渡不動

各務原台地から少し南に位置する矢熊山に前渡不動がある。

法印律師明心和尚が開山・開基である。十七歳の時、両目を失い千葉県にある成田山に参籠し開眼したといわれ、本尊は明治二十三年に勧請された成田山不動明王である。宗派は真言宗醍醐(たご)派である。

参道に番号順に立ち並ぶのは自然石で彫られた八十八体の石仏である。また、参道の途中には鎌倉時代に、この近辺での戦の犠牲者を供養した承久の変供養碑がある。本堂両脇の仁王像は、三代任職のお庫裏の実弟光運が、本巢郡北方町の圓鏡寺仁王像を手本とし彫った像で見事である。矢熊山は、約二億五千万年前に深海底堆積物が隆起したものとされており、太古の地震の影響で出来たのが参道や道沿いの褶曲(しゅうきよく)地層と思われる。

四月の第四日曜日には大祭が催されるので訪れてはどうだろうか。

訪ねてみよう中山道鶉沼宿 〈市内全域へ〉



中山道鶉沼宿ボランティアガイド

②② 河野西入坊

真宗大谷派の古刹・蓮如の杖が根付いたとされる大銀杏がある。

長徳二年（九九〇）源家国の末孫小島庄司康信が出家して創建。天台宗西入寺と称した。文暦二年（一一三五）任職行円は関東から帰途の親鸞に岡崎で教化をうけ、同志九人と共に木瀬三宅の草庵に親鸞を招き、本願念仏に帰依し、浄土真宗に転派して真宗隆盛の起因となった。

時移り本願寺八世蓮如は親鸞の旧跡を巡り当寺の荒廃を嘆き、時の

任職行念と計り河野道場の再興を果した。蓮如七十八才、自らの寿影を行念に与え、この絵像は蓮如が信心を込めたり。我傍らに居る心地していよいよ念仏の本願を喜び皆人共に報土往生の身になつてくれよ」と申された。

この絵像は延徳二年（二四九〇）の銘があり、毎年四月第四土曜日、日曜日に開帳され、「蓮如祭り」として多くの善男善女が参拝に訪れて賑わう。

訪ねてみよう中山道鶉沼宿 〈市内全域へ〉



中山道鶉沼宿ボランティアガイド

②① 安楽寺

この寺は、台地の南麓を流れる三井川の南にある。寺島山河野安楽寺といい、浄土真宗西本願寺派に属する。

寺伝によると、初代の住職一道阿舍利は親鸞聖人に帰依し門弟となり天台宗より浄土門に改宗した。寺号について河野を用いているのは、下中屋の西入坊と同様で河野九門徒の一寺の名乗りである。

徳川時代第十三代中興上人と仰がれた釋明順の代に、寺地を整備し堂宇を建立したと伝

える。領主旗本新加納坪内家の多大な援助もあり正門の瓦に坪内家の家紋を使用することが許されていた。

寺門にある親鸞聖人旧跡碑には「高祖聖人御旧跡二十四輩」とあり、往時を物語っている。本堂は歴史を持つ建物であったが、昭和三十年（一九五五）八月出火焼失。昭和三十九年十月信徒の熱意ある努力により再建され、落慶法要が勤修（こんしゅ）され、今に至っている。

訪ねてみよう中山道鶉沼宿 〈市内全域へ〉



中山道鶉沼宿ボランティアガイド

四月から
新シリーズへ



訪ねてみよう中山道鶉沼宿は、今回でひとまず終わりです。各務野台地を横断する中山道と街道を離れた市内全域から山緒ある文化財や神社・仏閣、伝承などをご案内してきました。二年間の愛護ありがとうございました。さてこのあと、四月からのこのシリーズは人ひとりでいこうということになりました。題して「各務野の人物往来〜古代から近代まで」、各務原市出身の人に限らず武将や産業・文化等の功労者、中山道を旅した人などを幅広くご紹介いたします。中には読者の皆さんが思わず「こんな人もゆかりがあったのか？」と思われる人々も取り上げます。トップバッターには古代・壬申の乱で活躍した武将村国男依（むらくにのおより）を予定しています。新シリーズをご期待下さい。

各務野を

めぐるガイドに

風光る

訪ねてみよう中山道鶉沼宿 〈市内全域へ〉



中山道鶉沼宿ボランティアガイド

②3 河跡湖公園



田鉄砲川に残る河跡湖を中心に、川島松倉町、河田町、松原町にまたがる都市公園である。平成二十一年にオープンし、第二十六回都市公園コンクール日本公園緑地協会主催の設計部門で国土交通大臣賞を受賞している。かつて木曽川の支流であった鉄砲川は、河川改修で廃川となっていたが、昭和四十二年にエーサイ川島工園が立地してからは工場の浄化した配水の放水路となっている。公園整備により川沿いのホウスト池、ミツヤ池を中心に、自然環境を生かし散策路や憩いの広場などの多様な空間をつくり出している。公園に隣接する秋葉神社には四百年前から続くといわれる八朔（はつき）相撲が伝承されている。時の松倉城主が武芸を好み相撲を奨励したことが始まりという。現在は子ども相撲として毎年九月一日に行われている。市の誇る宝の一つである。

中山道について

中山道は古代から東西をつなぐ重要な道であった東山道を元に、江戸時代に五街道の一つとして整備されました。全長は約534kmあり、宿場は板橋から守山まで67宿(東海道と合流する草津・大津を含めると69宿)が設置されており、岐阜県内には17宿がありました。

太平洋側を通る東海道とともに江戸と京を結ぶ主要な街道で、木曾路を通ることから木曾街道などともいわれていました。中山道は「木曾の棧、太田の渡し、碓氷峠が無くばよい」とうたわれる難所をはじめ険しい山間部を抜ける起伏の多い道でした。しかし、河川の増水による川止め等の障害が多かった東海道に比べると、予定通りの通行が可能であるという利点から、利用価値の高い街道でした。

113768774



各務原市図書館

鶉沼宿と助郷

江戸時代、大名の参勤交代や公家などの道中は、禄高・身分などで差はありますが、かなりの規模になりました。街道の宿場には問屋(といや)があり、一定数の人足や馬を常備していましたが、多人数の道中には足りませんでした。そこで設けられたのが助郷(すけごう)制度です。宿場ごとに予め近辺の村々を決めておき、必要に応じて人員を振出させました。鶉沼宿の助郷は現在の各務原市全域のほか、坂祝町や犬山市の一部も含まれていました。安い賃金で半強制的にかり出された農民と担当の宿場役人との間には、時にはいさかいもありました。